

横顔  
就任インタビュー



## 地域の将来を見据え 安全で高質な医療を

広島市立広島市民病院は1952年の創立以来、戦後の復興を支え、広島医療圏の中核を担う病院として発展してきた。2025年4月、新病院長に就任した松川啓義氏に、今後のかじ取りについて聞いた。

地方独立行政法人広島市立病院機構  
広島市立広島市民病院

まつかわ ひろよし

松川 啓義 病院長

1990年岡山大学医学部卒業。福山市民病院、京都大学医学部附属病院、岡山大学病院、広島市立広島市民病院副院長などを経て、2025年から現職。

地方独立行政法人広島市立病院機構 広島市立広島市民病院  
広島市中区基町7-33 ☎082-221-2291(代表)  
<https://www.city-hosp.naka.hiroshima.jp/>

専門的な医療に関して、広島で中核的な役割を担っています。今後も当院が現在広島で担っている役割を堅持し、さらに機能強化することを考えていきます」

### 広島患者さんに 先端的医療を提供

北米型ER式の救急外来と、救命救急センターを併設し、1次救急から3次救急まで対応しているのも特徴の一つだ。

「年々増加する7000件以上の救急搬送に加え、年間約2万人のウオーケインの救急外来患者さんを受け入れており、広島救急医療を支えています」

循環器疾患では、心筋梗塞などに対するカテーテル治療、ハイブリッド手術室での経カテーテル大動脈弁留置術(TAVI)などの低侵襲手術、脳血管疾患では、脳梗塞のカテーテルによる血栓回収術など、低侵襲手術に力を入れている。

また県内2カ所の総合周産期母子医療センターの一つとして、ハイリスク妊娠・分娩への対応や低出生体重児の集中治療も行っている。「全診療科の手術件数は、

16手術室で年間計約1万件。特にがん診療では地域がん拠点病院(高度型)として、多くの領域において全国レベルでも屈指の手術症例数を誇っています。25年に1室増やし、さらに手術件数

の増加を図る計画です」

積極的に低侵襲手術を導入し、手術支援ロボット(ダビンチXi)2台で年間500件を超える手術を行う一方、高精度放射線治療装置(リニアック)を用いた放射線治療、薬物治療や緩和医療も組み合わせ、集学的がん治療・全人的がん治療を推進している。

地域医療構想の中で重要な鍵となるのは、地域の医療機関との連携だという。同院での高度急性期・急性期医療を終えた患者を、急性期・回復期医療の機能を担う連携施設にシームレスに送り、救急医療に対応する病床を確保。新規入院患者を増やすためにも、医療支援センターを中心に連携強化に取り組んでいく。

### 職場環境を改善し 心のこもる医療を

日々業務に当たるスタッフの職場環境の改善も重視している。「経営が厳しいという話ばかりでは活気が出ません。毎日頑張っているスタッフが皆さんが、誇りを持って生き生きと働ける風通しの良い職場を目指したい」と意欲を示す。

「当院が市民から信頼される病院であることは、私たちの誇りです。地域の方の力を借りながら、これからも基本理念である『心のこもった安全で質の高い医療』を提供していきます」

### 厳しい状況の中で 環境の変化に対応

市立広島市民病院は、広島を中心に原爆が投下された7年後、1952年8月に4診療科、89床の病院として開院。その後、市民の支援や医療スタッフの献身的な努力と貢献によって37診療科、743床を有す

る基幹病院に成長した。

しかし、全国的に病院の経営環境が厳しさを増す中、2024年度は過去最も収入が厳しい状況となった。松川氏は「さまざまな取り組みを行い、経営改善を図ることが最優先課題」と強調する。

広島市内では県立広島病院が他の3医療機関と統合・

移転し、30年度には広島駅北側に1000床規模の新しい拠点病院が開設される計画が進んでいる。

市立広島市民病院も、建設後45年経過している棟を含めて、老朽化する部分を、30年から約11年かけて現地で建て替えを行う計画を検討している。

「当院は救急医療や高度で